
The good-natured guardian

ハチロー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The good-natured guardian

【Nコード】

N34830

【作者名】

ハチロー

【あらすじ】

エミヤシロウは聖杯戦争半ばにしてバーサーカーに破れた。座に帰還する途中で、プレシアに呼び寄せられてしまう。シロウは一体どうなってしまうのか？果たしてプレシアを救うことができるのか？

魔法少女リリカルなのはとのクロスです。

プロローグ（前書き）

こんにちは。私は小説を初めて小説を書きます。時間がなかなかとれないので更新は遅くなるでしょうが、精一杯やってみようと思います。

それでは

The good-natured guardian 始まりま
す。

プロローグ

ふう、と、彼はため息をついて、消えていく自分の体を見下ろした。既に輪郭は曖昧になり、彼は今にもこの世界から消え去ろうとしている。

短かったな、今回は。

そんなことを思いつつ、今おかれている状況を特に悲観することもなく、ただ冷静に受け止めている。

「案外呆気ないものだな。終わ리と言つものは。」

絶対的な“終焉”の前には誰もが屈する。例外など、あり得ない。彼もまた力尽きようとしている。

「まあ、取り敢えずは、役目を果たした、ということになるか。」

目の前には三メートルを超える巨体が横たわっている。今はピクリともしないが決して死んでいるわけではない。

いや、確かに殺しはした。五回ほど。

自分の奥の手だったのだがな、と彼は自嘲した。

まあ、後は彼女たちがうまくやるだろう。

……すっかりさえ無ければ、だが。

この世界の衛宮士郎はどうなるのだろう。私のような事にならなければ良いが。

いや、きっと大丈夫だろう。根拠は無いが、凜やイリヤが居てくれれば大丈夫な気がする。

あいつたち（守るべきもの）は衛宮士郎（私達）にとっての最高の抑止力になるのだから。

つと、そろそろ限界か。

いつの間にか、イリヤが自らのサーヴァントを連れて彼の傍に立っていた。ふむ、私を警戒しているな。

「貴方、何者？」

ここで答えてしまうと後々厄介だろう。凜は気付いていたかもしれないが、衛宮士郎に私の事を勘づかせるわけにはいかない。彼奴が衛宮士郎の可能性のひとつを、どう受け止めるか判らないからな。

「名乗るほどの立派な名など、生憎と持ち合わせていなくてね。ただの御人好しの弓兵さ。」

「……士郎、なのかしら？」

……やはり始まる前にイリヤと呼んでしまった以上は誤魔化せないか。しくじったな。

「……」

「イリヤスフィール、何を言っている。衛宮士郎は先程此処から逃げていっただろう。」

「……」

……ダメか。

そう睨むなよ、イリヤ。レディはそんな顔しないで。

「……」

くっ、限界だ。

「……」

「はぁ……イリヤ、頼みがある。」

「何かしら、士郎。」

「私を頼む。出来れば凜と一緒に見張ってやってくれと助かる。」

沈黙。

「士郎はやっぱり甘いよ。敵にこんなこと頼むなんて。」

敵、か。確かにそうだ。だがエミヤシロウではなく衛宮士郎にとってその言葉には違和感を感じる。

「此処ではそうではないが、イリヤと俺は家族なんだ。頼み事をするのは可笑しいことじゃあない。」

「家族、ね。貴方はどこまでいってもその調子なんでしょうね。」

「まあね。」

そろそろ不味いな。

普段の口調と昔の口調とが混ざっている。余程余裕が無いのだな。

「イリヤ、此処の私も相当なお人好しだ。せいぜい苦勞するがいい。」

体が、意識が、存在意義が、霧散していく。

あいつの為に布石を打ってやった。これからどうなるかはあいつ次第だ。せいぜい期待するでしょう。

「貴方はどうするの？」

「愚問だな。役目が終わった者は、消えるのみ、だ。」

そう、この身は座に戻るのみ。例外は、無い。

この後を、見届けられないのは、いささか、残念だが。

「イリヤ、皆と、幸せに、なれ、よ」

「貴方もよ。士郎。」

そうして独りの男はいなくなつた。

プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

たったこれだけなのに……

今回より次回！きつともっと上手く書ける！？

次回からは魔法少女リリカルなのはの世界に入ります。

試行錯誤が続きますので、しばらくお待ちください。

出会い（前書き）

The good-natured guardian（出会い）
始まります。

出会い

あるところに、心優しく、可愛らしい少女が居ました。その子はおとなしい子供で、いつも本を読んでいた。自分から友達を作るのが苦手で、いつも独りぼっちだったからです。これは、そんな女の子の物語です。

The good-natured guardian
～出会い～

とある次元世界の地方都市の街中を、一人の少女が走っていた。何かから逃げるように、疾走していた。ろくに前も見ずに走っていたので、人にぶつかったり、何かに躓いたりして、何度も何度も転んだ。泥だらけになって、あちこち擦りむき、着ていた青いワンピースも裾が破けてしまった。普段の彼女からは想像も出来ない様な有り様だった。

彼女は独りぼっちだった。昨年、唯一自分に優しく接してくれていた母を亡くしてから、彼女の居場所は完全になくなってしまった。父親は時空管理局に勤めていて、ほとんど会えず、会ったとしても

彼女とは一言も口を利こうとしない。小さい頃から友達を作るのが苦手だったので、これといって友達もいなかった。いや、友達はいたが、自分から積極的に関わろうとはしなかったので、だんだん敬遠されるようになってしまったのだ。

人は自分の居場所―他人が自分を認めてくれる場所―がなければ生きていけない。自分は誰かに認められている、そんな実感を持つことで、自らの存在意義を確認しているからだ。

ならば、唯一の砦であった母を亡くした彼女が、とても不安定だったのは当然だろう。誰一人として自分を見てくれない、そんな孤独は、僅か十歳の少女には重すぎた。

いつの間にか少女は町を出て、彼女の秘密の場所に来ていた。一面の菜の花畑。よく母と遊んだ場所だった。ここに来ると優しかった母親の思い出に浸ることができた。一緒に遊んで、一緒にお弁当を食べて、一緒にお昼寝して、一緒に本を読んで、一緒に家に帰った。

……あの頃は本当に幸せだったのに。

お母さん、わたし、どうしたらいいか判らないよ。

ずっと独りぼっちで、友達は出来ないし。

お父さんはわたしとお話ししてくれないし。

わたし、寂しいよ。

もうこんなの嫌だよ。

少女は顔をクシャクシャにして泣いた。かつて母と一緒に笑い合った場所で、今は泣いていた。自分の恵まれない境遇が、悲しかった。誰かにそばにいて欲しかった。

Side Shirou

とても悲しそうな泣き声が聞こえる。

声をかけてやりたい、と思ったが、それは不可能だ。私は座に戻るのみ。例外はない。

私も甘くなったものだ。これでは衛宮士郎かこのじぶんと同じではないか。イリヤにも言われたが、本質的な所は変わらないままなのか。

助けを呼ぶような泣き声が聞こえる。

つく、助けてやりたい。

……ふう、落ち着け。今回はかりはどうしようもないんだ。自分を誤魔化そうとする。

寂しい、と囁り泣いている。

……やはり我慢出来ない。

御託はもういい！こんなとき、セイギノミカタこの私がすることなど決まっている！

意識を声のした方へ向ける。

実体の無くなってしまった腕を伸ばす。

だが、座に引かれる力の前には全くの無力。

彼は座に縛られた自分の境遇を恨んだ。

あとどれくらいで届くだろう。

それとも届かないのだろうか。

……いや、まだだ。助けを求められてそれに答えられないなんて、
そんなのは認められない！
諦める訳にはいかない！

そして彼はさらに手を伸ばす。

くっ、まだか？

突然、チカツと前方が瞬いた。

む？なんだあれは。

その光はあっという間に彼を包み込んだ。

そして膨大な魔力の奔流に押し流されて、

彼は異世界へと旅立っていった。

Side ???

少女は目の前で起きた事を理解できずにいた。

ふう、まず落ち着かなきゃ。何が起きたんだっけ？

えっと、いきなり眩しくなつて、風が吹いて、思わず目をつぶって、目を開けたら男の子がいた。真っ赤な外套に黒い服、白い髪に黒っぽい肌。

歳はわたしと同じくらい。

……この子、何者？魔導師？

いきなり目の前に現れた彼は、私を優しい目で見つめている。

少なくとも悪い人じゃなさそう。

だから勇気を出して聞いてみた。

「あなたは魔導師ですか？」

男の子は黙ったままこちらをじっと見ている。

あれ？わたし何か気にさわるようなこと言っただけかな？また嫌われちゃうのかな？

「ああ、すまない。聞きなれない単語があつたので、つい考え込んでしまった。私はエミヤシロウで正義の味方だよ。君を助けに来た。だからそんな悲しそうな顔はしないで欲しい。」

えっ？わたしを？

「む？あの寂しそうな声は君のものだろう？その声に引かれてやって来たのだが。」

ええっ？わ、わたしが呼んだの？

「ふむ。その様子だと、無意識のうちに呼んだのか。無意識にわたしを座から引き剥がすとは、たいしたものだ。」

なんの事だかわたしには判らない。

「私のことだが、私はさっきも言ったが正義の味方でね、呼ばれたらそれに応じるのは当たり前のことだ」

正義の味方、と聞いて、思わず、白馬に乗った騎士を想像してしまった。

この人なら、私のそばに居てくれるかも。そんな淡い期待を持ってしまった。

だが、わたしはそこで今までのことを思い出した。

……いけない。なんて馬鹿なんだろう。期待しちゃいけないのに。この人もまた私から離れていくんだろう。だって今までだってそうだったんだから。仲が良かったあの子も遠くへ行ってしまったし、わたしのお母さんも死んでしまって、わたしの周りには誰もいなくなってしまうんだから。そう考えると、高ぶりがけていた気持ちも冷めて、いつものように殻の中に潜り込んでしまった。

そう。いつものように。

「そうというのは結構です。別に困っているわけではないですから。」

それなのに。何でこの子は優しい顔で私を見つめているのだろう。

「そんな辛そうな笑顔を見せられては、ますます後には退けないな。」

大丈夫だ。俺がずっと側にいてあげよう。

ダメ。せつかく今まで頑張ってきたのに。そんなに優しくされたら殻が破れてしまう。

拒絶しようとしたが、突然頭の上に乗せられた彼の手のひらがとても暖かくて、思わず涙があふれた。

無理しないで。

そういわれた気がした。

「俺がずっとずっと側にいてやる。」

ああ、お母さんみたい。

それが限界だった。

それが少女―プレシア・テストロッサーとエミヤシロウの出会いだった。

出会い（後書き）

どうもすみません。ゼルレッチ、出ませんでした。あんなチートな人自分ではとても扱いきれません（笑）

それはさておき、ついに出会ってしまった二人。いったいこれからどうなるのか。物語はまだまだ始まったばかりです。

P・S・来週から少し忙しくなります。少しずつ頑張りたいと思いますが、更新は遅くなると思います。ご容赦ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3483o/>

The good-natured guardian

2010年10月19日15時59分発行